

震災から五十日経って

下町 寿男

■ 3月11日 14時46分

進路指導部会の会計監査のため八戸高校と八戸東高校をまわってちょうど勤務校の八戸西高に戻ったときそれは起こった。

とんでもない揺れがいつまでも続き、校舎が崩れ落ちるのではないかという思いがよぎる。心臓が鼓動する。「大丈夫ですかー」「すぐに終わりますよー」机に潜りこんでいる同僚たちに声をかけながらなんとか歯を食いしばって平静を保とうとした。

この三月をもって退職する理科の実習教諭の先生が、前日夜八時頃まで学校に残って、翌日の、最後となる実験の準備を入念にしていたのを私は見ていた。地震はその最後の実験中に起こった。生物実験室では無残にも室内の蛍光灯がすべて落下した。生徒をグラウンドに避難させ、家庭と連絡を取らせながら19時までには全員を家庭に無事帰すことができた。翌日私は保護者への進路講演会を行う予定になっていたが中止し、生徒の登校も禁止した。

水道を除いてライフラインがすべて止まり、西高は新幹線八戸駅の最寄りということで、移動中の800人もの人たちの避難所（待機場所）となる。二日間、彼らの世話をを行った。後期試験受験のため移動中の学生も多く、学習スペース確保に生徒会館を開放。乳幼児を持つ家族などには、合宿所を手配したが、すべての希望に応えることはもちろんできない。校舎の前で車の衝突事故があり、車から運転者を救出し、救急車に乗せていくこともあった。私は進路部長なので、その合間を縫って後期試験に出かけた生徒の安否確認と、後期試験の日程の確認などに奔走した。自宅へは連絡が取れなかった。きっとあの阪神淡路大震災を上回る被害になるだろうと覚悟した。

12日の夜に停電が復旧した。灯りがついたとき、人生でこんなに嬉しいことがあるだろうかとさえ思った。夜、ようやく岩手の自宅と連絡がつく。

13日朝、八戸の自宅のパソコンで後期の大学受験日程の確認をして出勤。午後2時まで学校で業務。その後年休を取って実家の盛岡に水や食料などの支援物資を持っていき、その後自宅の紫波に帰る。岩手は沿岸中心に大変なことになっていることが徐々に明らかになっていく。更に原発の問題も発生し不安はますますつのる。

14日、朝自宅から娘を職場に車で送りながら八戸に向かう。高速が使えないため4時間かけて出勤。この日の午後、仙台に住む息子と初めて連絡が取れる。ライフラインすべて止まり幽閉されていることが判明。4日間、水も無くお菓子だけで生活しているらしい。

それを聞いて、大急ぎでガソリンを入れ（岩手と違って1時間待ちで20リットル買える）仙台に走る。高速は使えないが、そのかわり宮城県では信号がほぼ機能していないので夜はノンストップ。八戸を16時に出発し、午前0時前には仙台に着く。帰りのガソリンがぎりぎり間に合い、紫波の自宅に戻ることができた。13日から2日で750kmもの運転だったが、休憩無しなのに眠くなることは一瞬もなかった。それだけ緊張してアドレナリンが出ていたのだろう。15日は年休をとった。家族4人がいることが夢のようだった。

■ 生きてるだけで

岩手の状況が心配で沿岸方面の人にメールや電話などをしたが全く連絡がつかなかった。そんな時、川村先生が大丈夫という話を人づてに聞いたときは心の底からほっとした。高田高校では校舎の三階まで津波が押し寄せたという。何ということだ。

20日あたりから、メールが来るようになった。気仙沼で看護学校に通う卒業生からようやくメールの返信があった。何とか生きて自宅に戻ったとのこと。

「気仙沼は悲惨です。津波も見ましたし街が火の海になっているのも見ました」

でも、メールアドレスを見た私は携帯を握りしめて思わず「よっしゃあ」と泣き叫んでいた。生きてるだけで嬉しかった。

因みに、気仙沼の病院では、看護師が、自分の家族の安否も確認できないまま、不休で被災者の看護にあっているというニュースがあった。食料はまず患者へ配るため、ろくに食べることができないという状況である。何という尊い人たちなのか。最近、進路指導に携わる中で、安直な「とりあえず看護師希望」が増えている。そんな生徒たちにいいたい。「覚悟」はあるのかと。

杜陵サークルの安否は小宮山先生経由で知ることができたが、釜石の下河原さんは確認できなかった。何度もメールや電話をしたが連絡がつかない。ネット上で釜石の避難場所の名簿を何度も探すが見つからない。ネット上に死亡者のリストがあったが、それを見るのが怖い。勇気を振り絞って恐る恐るちらっと見る。心が潰れそうになる。そこに名前がないことを知りとりあえずホットする。そんな中だった。

学校から海を眺めると、壊れた防波堤が見ることができます。夜は40分くらいかけて徒歩で家に帰っていますが、相変わらず電気も通ってないので、サークル通信も作れないでいます。けれど、高田の川村先生の方がもっと大変なのだと思います。

下河原さんからのメールだ。よかった。この喜びをあちこちの人にふれまわりたくなる。サークル関係では大船渡の羽上夫妻の無事も確認。

メール復旧や、支援活動が始まっていく中で、安否が確認できるようになった。私が心配していた沿岸地方の多くの知り合いの先生方の無事もほぼ確認できた。

24日離任式があり、岩手に戻れることになった。岩手は人事凍結という状況にあり、私の人事は前日午後に決定したらしい。離任式直後、初任の宮古北高時代にお世話になっていた田老町の方の家にお見舞いに行く。前日連絡が取れ一家全員無事であることが確認できたのだ。八戸で20リットルのガソリンを積んで家族で田老町に。その方の家の前まで津波が来たらしい。目の前の川（神田川という）から毎日死体が上がる、今日も三体の死体があがったとのこと。壮絶で凄惨な現状を前にもはや涙も出ないという。家族は、むしろ不明のままより、死体が出てくるとホットするというあまりにも悲しい状況がそこにある。

そこからほど近くにある、死体安置所にもなっている宮古北高校に支援物資を届ける。周囲の人たちに避難を叫び、お年寄りをおんぶしたりして多くの人を救いながら、自らは津波の犠牲になってしまった当時の教え子の話を悲しい気持ちで聞いた。

■ 石割桜のように

「この津波を利用して日本人の積年たまった我欲の垢を洗い落とす必要がある。これは天罰だね」などという呆れる言葉も耳にしたが、心が暖まるような出来事もあった。

弘前大、東北大、岩手大、東北福祉大、消防士などに合格していた西高の卒業生達が、入学式が遅くなったということで、八戸の港の瓦礫撤去のボランティアに自主的に携わっていたことだ。関係者が、西高の卒業生がとても多いのに驚いていたということをお我々は後日新聞で知る。日頃から「進路指導は

自分を磨くこと」といっていた言葉がしみとおったような気がして嬉しかった。世界中からも支援の輪が広がった。例えばモンゴルの貧困地区に住む子供たちが、生活保護費の一カ月分を支援した話や、コロンビアのトイレもない小学校に通う子供たちが、日本の子供たちに絵を描いて送り、もし、自分たちのところに避難してきたら、あたたかい食事をご馳走したいといっている話には心が打たれた。最近、日本文学研究科のドナルドキーンが「この震災で決意した」といって日本人と共に、日本人のためにできることをしたいと、日本に帰化し永住することを決めたという記事があった。ちなみにドナルドキーンは88歳である。

映画「コンタクト」の中で、エリー博士は宇宙から信号をキャッチする。そのノイズの回数が100までの素数回になっていることに気づき、これは宇宙の知的生命体からの信号であると主張する。なぜ知的生命体なら英語などの言語でメッセージを送らないのか、という質問にエリーは「数学は宇宙の共通言語なのです (Math. is only true universal language)」という。この話は数学の時間私がよく引用する言葉だ。しかし、このような世界からの支援のニュースを聞くにつけ、世界の共通言語は「仁」であり「絆」であり「愛」であったという思いを強くした。

私は現在岩手県庁に勤めている。県庁の前に「石割桜」がある。ちょうど今満開時である。特に今年は、この石割桜の写真を撮りに来る人が多いようである。

きっと、石割桜に人々は、逆境や苦しみに負けないで花を咲かせる強い意志をみているのではないかと思う。

離任式の際、生徒に「私たちはかけがえのない多くのものを失った。でもまだ失われていない未来のために希望持って頑張ろう」と言った。

石割桜のように、冬の時期であっても春を思う強い気持ちを失わず、未来に美しい花を咲かせよう。

(2011年 4月30日)



震災から半年が経過して

～We are not afraid today～

下町 壽男

震災から半年経とうとしている。「時が解決する」という言葉がある。今なお「汲めども尽きぬ」瓦礫の山を前にしている人々にとって、それはあまりに気休めというものである。しかし、恐らく何年も時が経てば、いずれは収束に向かうのだろう。

では、被災地の人の心の傷はどうだろう。時とともに雲散霧消していくのだろうか。

妻も子も失い、そしてその亡骸も未だに見つからないまま、それでも懸命に被災地の生徒達のために教育活動を行っている教師がいる。私は彼に何も語りかけることはできない。胸が張り裂ける思いを抱きながら悲しむことしかできない。

母も家も失い、他県から親戚を頼って岩手の高校に転校した生徒がいた。教師たちがお金を出し、住居や生活の支援をした。迎える生徒達もその子を励まし、部活動など共に活動する中で、打ち解けあい仲間となった。しかし、三カ月もしないうちに、家庭の状況が変化し、別の地に向かうことになった。その子が学校を立ち去るとき、生徒も教師も皆泣いた。それは「別れの涙」ではない。なぜ、その子は何もしていないのに、こんなつらい思いをして生きていかなければならないのか。彼女の運命に対してのやるせなさからの涙なのである。

このような幾多の凄惨な状況を前に、時が解決するなどとは決して言えぬ。

その一方、時とともに着実にノー天気になっている最近の周囲の状況に、私は今とても滅入っている。それは、被災地支援という名目で一発稼ごうというテレビのバラエティやタレントなどの売名行為だったり、政治家が被災地で瓦礫をバックにピース写真を撮って走り去っていく視察だったり。

そういえば、誰かの「この津波を利用して日本人の積年たまった我欲の垢を洗い落とす必要がある。これは天罰だね」という発言に始まり、京都の送り火問題や、東海テレビの「怪しいお米セシウムさん」そして、ネット上での「東北の人間はこっちに来るな」「何も持ち込むな」「(甲子園で負けたチームは)早く帰って瓦礫を片付けてろ」などという書き込みが頻発されている状況を見たとき、私は、東北人にとって忘れられぬ過去のある言葉を想起せざるを得ない。

それは、あるビール業者の社長による「仙台遷都などアホなことを考えている人がおるそうやけど東北は熊襲の産地。文化的程度も極めて低い」というあの熊襲発言である。

つまり「セシウムさん事件」も「送り火事件」も、そして「ネットの書き込み」も、すべて東北に対する差別と蔑視の発露であると思えるのだ。

差別意識を秘めたまま、スローガンだけの復興支援や慈善活動に対し、私はあの天才ガロアのセリフを引用しようと思う。

「慈善だって？ほくはそんな言葉は大嫌いだ！貧乏人や不幸な人間を金持ちの善良な衝動によりすがらせ、金持ちに対する貧乏人の闘争意識を殺ぎとるのが慈善だ。慈善は国家の神聖な義務を、個人のムラ気に置き換えるものだ。斧を持ってこなけりゃ割れないようなパン、また二日間も水に浸しておかないと食えないようなパンを食っている家族は、パリにはいく干あるか知れないよ。そんな人々は、土間の部屋にわらを敷いて住んでいるんだ。部屋の空気は臭く、じめじめしていて、どんな上天気でもうす暗いんだ。君はそんな人々に、慈善と愛をもたらそうという。めっそうもない！彼らは憎しみを持たなきゃならないんだ。憎悪は彼らの権利だ。彼らの窮状を当り前だと思っているやつらを滅ぼすのが、彼

らの権利なんだ」(「ガロアの生涯」Leopold Infeld 訳 市井三郎)

ガロアのとんがった、ある意味鬱屈したメンタリティを引き合いに出すのはどうかとも思ったが「でくのぼう」と呼ばれても静かに笑っているほどに東北人は人が良すぎるのだ。

そんな現状ではあるが、いや、だからこそ、私は、AMIの多くの方々からの支援や、被災地の教育復興のための様々な行動に接し、希望を持つことができた。

この震災後の今、人権を尊重し、平和と民主主義、助け合いの精神の文化を創造することが教育の使命である。つまりそれは教育の側からの復興支援である。

しかし、その崇高な使命を果たすことは、授業をノルマとして成立させるための「術」を模索し奔走する教師や、知の探究活動を時間の浪費と考え、大量のアサインメントによって、直前のテスト対策だけに没頭するような、思想性の無い薄っぺらな教師にできるものではない。

今教師に必要なのは、世界の情勢や、子どもの教育環境を読み解く力を持ち行動すること、利害を離れて、美しいものを美しいと判断できる能力を持つこと、数学を本当に楽しいと思っていて、その楽しさを生徒に伝える力を持つこと、子どもと向き合い、高い志を持ち、授業の質を高める姿勢を持つこと、などではないかと思う。

そういう意味で、AMIのこれまで築いてきた理念と実践の集積、そして優れた実践家達によるネットワーク。これらは今後大きな力となるのだと私は感じている。

瓦礫撤去やインフラ整備により街が復興していくのに伴って、私たちは「思い」を風化させていってはならない。

子どもに豊かな教育と、心のケアを行うこと。そして、差別や蔑視に毅然と立ち向かい周囲の多くの人たちを巻き込んで、スクラムを組んで乗り越えていく、そんな力と勇気を与える教育を行うこと。私達が教育屋のはしくれであるならば、そんな心の復興のための教育に立ち上がらなければならない。我々の出番なのだ。 We shall overcome someday !

(2011年 8月31日)